

新大陸の『二都物語』—シカゴとロサンゼルス—

武・アーサー・ソントン

1. 「典型的なアメリカの大都市」とは

ニューヨーク？

コミック・イラストで一世を風靡したユダヤ系アメリカ人、ソウル・スタインバーグは生前、アメリカの最もしゃれた雑誌とされている『ニューヨーカー』（*The New Yorker*）の表紙を85、挿絵イラストを642手がけた。その彼のおそらく最も有名な作品は、1976年3月29日号の表紙、題して「ニューヨーカーが九番街から見た世界の眺め」（またの題名を「田舎者ニューヨーカーの世界の眺め」、「ニューヨーカーの世界の眺め」というもので、ニューヨーカーがいかに自己中心的に世界を見ているかを描いたものである。（図版1）



<図版1>

この絵の構図は上下二つに分けられて、下3分の2はマンハッタンの九番街、十番街、ハドソン川（きちんと名前入り）が占め、上3分の1は残りの世界が描かれている。つまりアメリカ合衆国の他の部分はニューヨーク市のこの3ブロックと同じ大きさの四角で、ハドソン川に沿った茶色の線が「ジャージー」で、五つの都市名（ワシントンDC、シカゴ、カンザス・シティー、ラスヴェガス、ロサンジェルス）があり、三つの州名（ユタ、ネブラスカ、テキサス）が三つの岩の塊についていて、ニュージャージーの向こうのアメリカ合衆国となり、太平洋はハドソン川の半分くらいの幅でその向こう岸に中国、日本、ロシアという名前のついた低い丘陵が見える。

この表紙はニューヨーカーがいかに自分たちを特別視しているかをコミカルに描いているが、同時にアメリカの他の地域の人々がニューヨークをいかに捉えているかを示している面もある。アメリカ「本土」から見れば、ニューヨークはマンハッタン島という名のとおり魅惑と歓楽と犯罪に満ちた「離島」だったのだ。そのイメージはいつもニューヨークにつきまとい、アメリカの大都市というよりはパリやロンドンに並ぶグローバル・シティーと考えられてきた。

シカゴとロサンジェルス

では、どこが「典型的なアメリカの大都市」と考えられてきたのだろうか。二つの都市がその首位候補として浮上する—シカゴとロサンジェルスである。詩人ウォレス・ステイヴンスが1899年8月1日の日記に『『近代性』（“modernity”）とは、何とシカゴ的であるか』と書いたように、二十世紀前半においてシカゴは、超高層ビルを「発明」し、ミシガン湖岸に摩天楼の壮大な景観を作った「モダン都市」そのものであった。シカゴの平坦で広大な土地とアメリカの鉄道網の中心地としての立地条件は、フォード方式大量生産の大規模製造産業に最適であった。このシカゴがセオドア・ドライザー、リチャード・ライト、カール・サンドバーグなどに代表されるアメリカ都市文学の誕生の地であることは、多くの認めるところである。さらにアメリカ文学史上重要な雑誌である『ザ・リトル・レビュー』（*The Little Review*）が、1914年にマーガレット・アンダーソンとジェイン・ヒープによって発刊されたのも、シカゴだった。『ザ・リトル・レビュー』は、新興の若い世代の文学の表明として、意識的に、若々しい理想主義を体現する都市というイメージでシカゴをとらえ、この都市からアメリカ文化が発信されていくというスタンスをとった。

製造産業が動かしてきたシカゴがアメリカを代表する「モダン都市」だとしたら、ロサンジェルスは消費でその経済が動く「ポストモダン都市」そのものである。1965年のロック音楽の古典「カリフォルニア・ドリーミン」（“California Dreamin'”）が歌うように、この都市は二十世紀中葉に、陽光とハリウッドによってアメリカ最西部のユートピアとして現れてきた。しかし次第にそれはフリーウェーとスモッグと犯罪から成るディストピアの面も持つようになった。ブレット・イーストン・エリスの処女小説『レス・ザン・ゼロ』（Bret Easton Ellis, *Less Than Zero*）（1985年）は、ロサンジェルスの、裕福ではあっても疎外され死にとりつかれたティーンエイジャーの話だが、このユートピアとディストピアの複合体としての都市をよく表わしている。

アメリカには他にいくつかの大都市と言えぬものがあり、シカゴとロサンジェルスのみで代表させることには無理があることは否めない。ただ、この二都市は、アメリカの都市として欠くことのできない例であるばかりでなく、過去において、いわば「アメリカの都市論」を体現するものとなり、この二都市の実例を基礎として、二つの重要な都市社会学理論が発展していっ

たという経緯があるのである。本文は、シカゴとロサンジェルスがそれぞれいかに特徴的な都市社会学理論を發展させたかを、二都市の歴史的、地理的、文化的条件を考慮しながら考えることによって、アメリカの大都市の「典型」が意味するものを示そうとするものである。

2. シカゴ

「シカゴ学派」の誕生

二十世紀初頭の北米において、シカゴほど都市社会学という学問分野の誕生にふさわしい都市は考えられないだろう。1840年には人口わずか4,470であったこの中西部の町は、1890年には1,100,000に、1930年には3,500,000の産業都市へと爆発的に膨張した。これが都市発展のワールドワークの絶好の場を提供することになり、1892年にシカゴ大学に「社会・人類学科」の創設を導き、世界における「社会学」の中心となったのである。いわゆる「シカゴ学派」は、この社会学創成期から1930年代ごろまでのシカゴ大学の社会学の研究方法を基礎として活躍した学者たちを総称するものである。彼らの論文を一堂に集めた1925年出版の『都市』(*The City*)は、今では都市社会学の古典とされている。

ロバート・パークの功績—都市の生態学

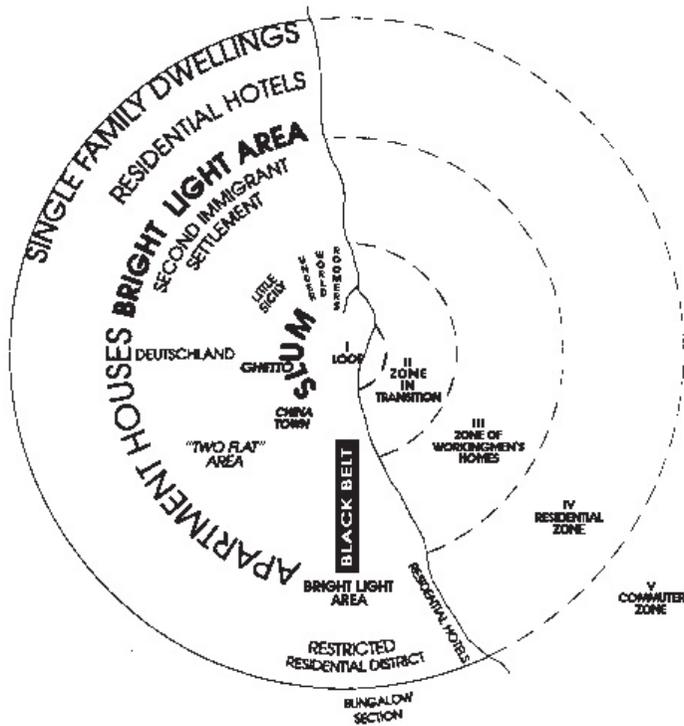
「シカゴ学派」の都市社会学の理論的創始者はロバート・パーク (Robert E. Park) である。彼はジャーナリスト出身であったが、ヨーロッパで専門的な教育を受け、ハイデルベルク大学で哲学と心理学の博士号を取得している。パークの理論にはヨーロッパの学者たち—マルクス、ダーウィン、ダークハイム、ヴェバーなど—の影響が見られるが、特にベルリンで直接に教えを受けたゲオルク・ジンメル (Georg Simmel) の影響は大きい。ジンメルといえば1903年の論文「都市と心理生活」(“Die Grossstädte und das Geistesleben”)によって都市論の創始者と考えられている。ただ、パークの特異な点は、ジンメルをはじめとするこれらのヨーロッパの学者たちの業績が抽象論に偏る傾向があったのに対して、パークはそれら、とりわけジンメルの理論を、移民の多文化都市であるシカゴに具体的に適用した点である。

パークの理論の基礎になっているものは、まずジンメルが注目した、経済活動の大都市集中によって起こるおびただしい種類の労働の分業である。パークはこの考えをシカゴに適用し、都市における分業の結果としての新しい「都会人の諸タイプ」を具体的に提示した—「売り子、警官、行商、辻馬車御者、夜警、占い師、ヴォードヴィル芸人、いかさま医師、バーテンダー、地域の政治指導者、スト破り労働者周旋屋、労働者煽動家、教員、記者、株屋、質屋」(14頁)などである。パークはまた、ダーウィンの自然選択による進化の理論、すなわち優位な種による適者生存の理論を援用し、人口の流入、定住、優勢という経緯を、特定の植物の種がいかにある土地で優勢になるかという植物生態学のプロセスにあてはめたのである。すなわち都市を、絶え間ない移民の流入によって新しい社会的エリア—たとえばスラム、ゲットー、裕福な住宅街など—を作り出していく一種の有機体と見るのである。

アーネスト・バージェス—「同心円理論」

このパークの生態学的な都市エリアのモデルの理論を図式化したのが、シカゴ大学で彼の下で研究したアーネスト・バージェス (Ernest W. Burgess) である。彼は一九二五年の論文「都

市の成長」(“The Growth of the City: An Introduction to a Research Project”)において、現実のシカゴを例にして、有名な「同心円理論」を打ち立てた。中心の第一円周はシカゴの「ループ」と呼ばれる高架鉄道で、そのなかには中心のビジネス街がある。その次の第二の円周は、低所得の第一世代移民の住宅地であるリトル・イタリアやグreek・タウンのなどの中に、ビジネスと軽工業が侵食しつつある「過渡ゾーン」と呼ばれる地域である。このゾーンの外側の第三円周は、環境悪化した内側の地域から逃れてきた、第二世代移民のつくったジャーマン・タウンのような移民街がある「労働者住宅ゾーン」である。そのさらに外側の円周は「住宅地」であって、「高級アパート群」や「一戸建ての、排他的高級住宅」とその外の郊外と衛星都市からなる市外の「通勤者ゾーン」が含まれる。(図版2) この図形モデルで、バージェスは都市の同心円性を指摘しているだけでなく、それぞれの円周を形成する法則を示しているのである。すなわち、<内側のゾーンはそれぞれ、その次の外側のゾーンを侵食して広がる傾向がある>という法則である。こうして都市の成長は、中心から始まって、各部分を侵しつつ外側に広がるというわけである。



<図版2>

このような法則化で明らかなように、パークとバージェスの理論はシカゴだけでなく北米の都市一般に適用されるものとされており、移民が都市の成長を推進する動力であるとしている。新しく流入する移民は、アメリカ社会への同化のプロセスにおいて新しいエリアと新しいタイプの住民を作り出していき、都市の原材料ともいべきものなのである。そして、中心のビジネス街から放射する同心円ゾーンのモデルは、外側へ行くにしたがって経済的・社会的ス

テータスが高くなると同時にアメリカ文化への同化の度合いも増すことが注目される。小説と映画で私たちになじみ深い『ゴッドファーザー』はまさに、この都市の成長と呼応する移民の移動を反映している。シシリアから移住したコルリオーネ一族は、第一世代では人口密集したニューヨークの中心市街地にある貧しいイタリア人のゲットーに住み、第二世代はロングアイランドの郊外住宅地へ移り、最終的には遥か西部のレイク・タホーにまで移り住んでしまうのである。

「同心円理論」の修正と批判

バージェスのこの明快な理論は、長い間、多くの地理学者や社会学者を魅了し、さまざまな修正論が出され、同心円ゾーンの都市観は衰えることがなかった。たとえば、1933年に不動産経済学者ホーマー・ホイット (Homer Hoyt) は「扇状モデル (Sectoral Model)」という理論を発表したが、これは近代資本主義都市が、都市の中心からその流通経路に沿って「活動のさまざまなくさび形」を形成して成長するとするものである。1945年には地理学者チャンシー・ハリス (Chauncy D. Harris) とエドワード・ウルマン (Edward L. Ullman) により「マルチ・ニュークライ・モデル (Multi-Nuclei Model)」という理論が出されたが、これは都市が一つでない、複数の経済活動の中心 (核) の周囲に発展するとするものである。バージェスの影響の大きさは、歴史学者デニス・スミス (Dennis Smith) の以下の言葉に集約されるだろう—「シカゴのような近代アメリカ都市の急速な拡大期に、半月とダート標的版を組み合わせた5つの同心円状の都市ゾーン図表ほど、社会科学の分野で有名な図表はない」(28頁) と。

だが、1970年代までには、パークとバージェスに代表されるシカゴ学派的生態学的都市社会理論は、都市の成長についての極端に一面的な説明として、広汎な批判にさらされることとなった。その批判とは、第一に、過去から現代まで社会が直線的に進化し、都市も同心円上を直線的に成長していくという単純さであり、第二に、都市成長の過程に社会構造的制約を無視し、行為者 (個人や移民グループ) の選択を中心として都市の形態が作られていくとする解釈であり、第三に、都市を、中心が周縁を支配する統一体と捉える考え方であり、第四に、都市の政治・経済・文化の説明をするのに、擬似生物学的な比喩に頼りすぎる点であった。

「シカゴ学派」の大いなる遺産

そのような多くの批判にもかかわらず、シカゴ学派的都市社会学理論は、さまざまな学問分野や社会政策一般に絶大な影響をおよぼした。大恐慌後の公共政策にはシカゴ学派が大きな力を発揮したことは否定できないし、その遺産は現代までも続き、たとえば現代の都市再開発の理論にも大きな影響を与えている。さらにシカゴ学派は、文学のような一見縁遠い領域にまで、大きな足跡を残したことを忘れてはならない。シカゴがアメリカの都市文学の誕生の地であることは、多くの研究者の認めるところであるが、アメリカを代表する黒人作家リチャード・ライト (Richard Wright) が1945年に語った以下の言葉は、シカゴの都市文学がシカゴ学派的理論を強力な後ろ盾にしていたことを明確に示している—

シカゴは最も鋭く急進的な黒人思想が誕生した都会である。この都会には、生きる希望を殺してしまうか、さもなければ逆に生命力を与えるような開放的なむき出しの美がある。私は、書きたい、自分の話を語りたいという、口に出せない渴望を抱いて逃げ込んだ都会で空腹と

怖れで生きた心地もなかった頃、あの、可能性と死と希望の極限を感じたのだ。だが、私は自分の語るべき話は何なのか分からなかったのだが、そこで科学というものに遭遇してはじめて、私は自分を打ちのめし、嘲笑した環境の意味を見出し始めたのだった。私は、都会の黒人の生活に関するさまざまな事実を集めて、黒人コミュニティーの研究をしている人々の著書を読み、誠実な芸術と真摯な科学はかけ離れたものではなく、互いを豊かに高めることができると分かった。シカゴ大学社会科学科によって蓄積された膨大な事実の山は、都会の黒人の身体と魂を形成するもろもろの力を、私に初めて具体的に見せてくれた。(xvii-xviii頁)

あの『アメリカの息子』(*Native Son*)の誇り高い作家がこのように謙虚に自分の創作を支えたものを認め、また文学と社会科学の密接な関係を教えてくれたものを認めていることは感動的ですからある。「シカゴ学派」の大きな意義を証言する言葉である。

3. ロサンジェルス

「中心のない都市」

文学批評家フレドリック・ジェイムソン (Fredric Jameson) は1970年に、レイモンド・チャンドラーのハードボイルド探偵小説の都会背景について、つぎのように言っている—「ロサンジェルスはすでに国全体のマイクロコスモスであり、未来の予告である—中心のない新しい都会、そこでは各自が自分の地理的区画の中に隔離され、さまざまな階級が接触しあうことがない」(98頁)。ジェイムソンが指摘した、このロサンジェルスの特徴は、一九六〇年代頃からケヴィン・リンチ (Kevin Lynch) などの地理学者がすでに気づいていたものである。この「中心のない都市」ロサンジェルスは、地形的には北にサンフェルナンド・ヴァリーへと広がり、南にはサンベドロの港へと細く伸び、太平洋に向かって西へ多くの町々を飲み込んでいく独特の形態を呈し、その中に、いわば行き当たりばつりにフリーウェーが走り、「ゲイテッド・コミュニティー」、「ギャング・ランド」、「エッジ・シティー」、監視カメラが常に見守っている公共の場所、そして夢を売り物にするショッピングモールやテーマパークが無作為に散らばっている。

「LA学派」の誕生

ロサンジェルスを前にして地理学者たちに、今、非常に異質のアメリカの大都会が生成されているのだ、という意識が広がった。彼らは、中心から同心円状に広がるシカゴのような比較的密集した都市を対象とした「シカゴ学派」の理論では、ロサンジェルスは説明できないだろうと感じたのである。地理学者マイケル・デア (Michael J. Dear) とスティーヴン・フラステイ (Steven Flusty) は1998年共著の論文で、「我々は都市の発展のしかたに根本的な断絶を見ているのだろうか」(50頁)と問いかけ、彼ら自身の答えは無条件の「イエス」であった。このような背景の中で、カリフォルニア大学ロサンジェルス校および南カリフォルニア大学に関係している学者たちの中からいわゆる「LA学派」が生まれた。この名称はもちろん、先輩である「シカゴ学派」に敬意を表したものである。ロサンジェルスは過去において長い間、「例外的な」都市であったが、「LA学派」の基本的な主張は、ロサンジェルスが—シカゴではなく—現代の都市論研究に最適な場所である、というものである。

南部・南西部へのパワー・シフト

「LA学派」のこの主張は、すでに1970年代ごろからアメリカ全体の中で南部と南西部の重要性が高まってきていたという状況を反映している。1976年に出版されたカークパトリック・セイル著の『パワー・シフト』(Kirkpatrick Sale, *Power Shift*)は、この変化を政治・経済の面から予言していたのである。この本は、1960年代・70年代にアメリカで起こっていたある決定的なパワー・シフトを指摘した。それは、ボストン、ニューヨーク、デトロイト、シカゴなどの東部・中西部で長年にわたって優位にあったいわゆるオールド・マネーによる「ヤンキー経済」が、ヒューストン、フェニックス、ラスヴェガス、ロサンゼルスなどの南西部にある攻撃的な成金の「カウボーイ資本主義」に取って代わられた状況のことであった。これはとりもなおさず、アメリカ経済の「ポスト・フォード方式」への移行を意味するわけだが、この移行は政治的には当然、1960年代以降の大統領(リンドン・ジョンソン、リチャード・ニクソン、ロナルド・レーガン、そして最近のジョージ・ブッシュ父子)がこの地域の出身であることと無関係ではないだろう。年を経るにしたがって、この移行はロサンゼルスに集中していくこととなり、1991年にはジャーナリストのジョエル・ギャローがその著『エッジ・シティー』(Joel Garreau, *Edge City*)の冒頭で、こんな警告とも思われることを述べている—「すべての成長しているアメリカの都市は、ロサンゼルス型に成長している」(3頁)と。

ハリウッドの影響力

ここで忘れてならないことは、このような学者やジャーナリストばかりでなく、いや彼ら以上に、ロサンゼルスを実際のアメリカの典型的未来として盛り上げていったのは、ハリウッドであったとも言えるのである。1940年代のノアール調映画から『チャイナタウン』、そして『ボーイズ・イン・ザ・フッド』から最近の『コラテラル』に至るまで、ハリウッド映画はロサンゼルスの商品化し、この都会を抽象的な背景として、アメリカ全体が一般的に対峙するさまざまな政治的・経済的・社会的問題を扱ってきた。

1982年のハリウッド映画『ブレードランナー』は、このハリウッドとアメリカ社会の関係を暗示するよい例である。リドリー・スコット監督のこの映画は、フィリップ・K・ディック(Philip K. Dick)のSFを基にしたものであるが、1992年の「LA暴動」や1994年の大震災後、ロサンゼルスが「サンシャインの地」から暗いディストピア的なイメージを帯びてくるにしたがって、ますます、ロサンゼルス、そしてアメリカ全体の暗い未来の可能性を暗示していると解釈されるようになった。無数の煙突の煙が惹き起こす酸性雨の中に都会の灯が霞む最初のシーンから、ネオンが鈍く光る暗い街路、そこにたむろする多民族下層階級の住民たちなどを通して、映画は環境汚染と多民族社会の不安を強烈に提示する。『ブレードランナー』が2019年の仮想のロサンゼルスにおいて、断片化した経済活動、アウトソーシング、脱中心化、監視社会というポストモダンの社会問題の仮想の結果を表現しているとするなら、「LA学派」は、現実のロサンゼルスの現実のこれらの問題を研究対象としたと言えよう。

前述のマイケル・ディアとステイヴン・フラスティエーに加えて、「LA学派」に属すると考えられている人々には、地理学者アラン・スコット(Allen J. Scott)、マイケル・ストーパー(Michael Storper)、エド・ソウジャ(Edward W. Soja)、マイク・デイヴィス(Mike Davis)などがある。この中の特に著名な三名を紹介しよう。

マイケル・ディア

マイケル・ディアは「LA学派」の存在を最も喧伝し、さらにロサンゼルスこそが現代の都市社会学の最適な研究対象であることを証明しようとしている学者である。彼の基本的な主張は、以下の文に要約されよう。

シカゴ学派の同心円構造は本質的に、都市とは有機的組織力をもつ中心核の周りに累積して出来るものと捉えている。我々はその代わりに、グローバル化した資本主義のもとで都市の周縁が中心を有機的に組織していく、ポストモダンの都市化の過程を示した。シカゴ型の伝統的な都市の形態は否定され、小さな塊となった、消費者向けのさまざまな風景の非連続的コラージュとなり、そこには伝統的中心はないがそれぞれがコードによって電子的に隣接し、逆情報のスーパーハイウエーの諸々の神話によって名目上は統合されているのである。(57-9頁)

このように、ディアはシカゴという「モダン都市」を基にした「シカゴ学派」の理論の、ポストモダン時代における無効性を正面から指摘し、ロサンゼルスのような都市こそ現代、そして未来の都市の典型であり、そのための新しい都市社会学はロサンゼルスを基に考えるべきであるとしたのである。

エド・ソウジャ

ディアの挑発的な議論と新造語はしばしば学会内で論争を引き起こすこととなったが、エド・ソウジャは、ディアよりもずっと穏健な議論をしている。『ポストモダン地理学—社会批評理論における空間の再評価』(*Postmodern Geographies: The Reassertion of Space in Critical Social Theory*) (1989年)において、ソウジャは「長い間、異常な、特異な、奇怪なほど例外的なものとして学問的には無視されてきたロサンゼルスは、また逆説的なめぐり合わせで、他のいかなる場所よりも二十世紀後半を見る規範となるような場となったのである」(221頁)としている。ロサンゼルスの特異性をポストモダン都市の標準的な要素としている点はディアと似ているが、そこで彼が観察した結果はディアとは多少ちがっている。

まずソウジャはロサンゼルスのダウンタウンの60マイルの円周内にある5郡(12,000,000の人口、132市、250億ドルの経済活動)を分析し、その滑稽とも言える複雑さを示す。フリーウエーを降りる場所によって、エドワーズ空軍基地、インディアンがほとんどいない「インディアン居留地」、最後のコンドルが鉛中毒を避けて地元の動物園に保護されてしまった「コンドル保護地区」に出る。60マイルの円周内には、スキー場もあればオレンジ園もあり、スペイン系の古い伝道教会もあればヒスパニックの居住区もあり、行楽地も留置所もあり、危険な市街地から住民を隔離する門と守衛と高い塀で囲まれたいくつもの超富裕層のゲイテッド・コミュニティもあればいくつものエスニック地区もあり、いくつものビジネスセンターがあればいくつものエッジシティーもあり、高給取りの白人の知的労働者を雇用するハイテク産業中心地(technopoles)やハイテク産業外縁部(technoburbs)もあれば、ヒスパニックとアジア系を主として雇用する工業地域もある、といった具合である。

このような複雑性にもかかわらず、ソウジャはこの60マイルの内側に「シカゴ学派」に由来する伝統的な都市構造のモデルを見ることもできないことはないとしている。たとえば、ロサ

ンジェルスには依然として中心となるビジネス街があって、バージェスの「同心円理論」の内部構造の特徴をもっている。また外側に向かう放射状の拡大も見られ、不動産経済学者ホーム・ホイトが70年前に提示した「扇状モデル」がダウンタウンから外側への発展に観察できる場所もある、としている。ソウジャはディアのように「シカゴ学派」の理論を真っ向から否定することはなく、むしろロサンジェルスのようなポストモダン都市にも「シカゴ学派」の遺産を有効利用できることを示しているのである。

マイク・デイヴィス

「LA学派」の中でおそらく最も独創的な議論を展開しているのが、マイク・デイヴィスであろう。彼は社会主義者を自負しているだけあって、ロサンジェルスのビジネス界、ロサンジェルス市当局、ロサンジェルス警察（彼はかの有名なLAPDをネオ・ファシストと呼んでいる）、『ロサンジェルス・タイムズ』から、果てはロサンジェルスを拠点として活躍する世界的な建築家フランク・ゲイリー(Frank Gehry)までも攻撃の対象としている。彼は1990年の著書『クウォーツの都市—ロサンジェルスの未来発掘』(*City of Quartz: Excavating the Future in Los Angeles*)で、ロサンジェルスが「資本主義の進行につれて、ユートピアとディストピアの両方の役割を演ずるようになった」(18頁)と主張する。なかでも「LA要塞」(“Fortress LA”)と題する章は、おそらく最も有名な箇所であろう。排他的なゲイテッド・コミュニティやバンカー建築と呼ばれる戦場のバンカーのような住居がある「要塞都市」となったロサンジェルスが、公共の空間というものを破壊してしまった状態を指摘している。このフコー的な視点は、ロサンジェルスが社会崩壊寸前の都会として描いているが、この本の出版の一年後に起こった「LA暴動」は、デイヴィスの議論の正当性を証明したことになるのである。

1998年の著書『恐怖の生態学—ロサンジェルスと災厄の想像力』(*Ecology of Fear: Los Angeles and the Imagination of Fear*)では、デイヴィスはバージェスの「同心円モデル」から彼独特の改訂版ともいべきものを作り上げている。この書の最後の章『「ブレードランナー」を超えて』において、彼は「私の改訂版はバージェスの未来版ともいべきものだ。これは所得、地価、階級、人種などの『生態学的』決定因子を維持しつつ、一つの決定的な新しい要素—「恐怖」—を追加しているのだ」(363頁)と、ハリウッド映画のタイトルそのままの形容を使っている。その改訂版が示すロサンジェルスは、民営化した刑務所の円周が最も外側にあり、その内側に富裕層の排他的なゲイテッド・コミュニティ群が一連のエッジ・シティと環状につながり、さらにその内側にはいくつもの労働者階級の地区や、特別な監視によってドラッグ・ギャングの活動できない公園など多様な輪があり、その内側にある中心のダウンタウンはホームレスや売春婦を集めた地区でもあり、防犯カメラの監視技術がスキャンする「スキャンスケープ」となっている。つまり、円環の重なりの中で何らかの危険が予測され、その恐怖に対抗するものが配備されている都市なのである。

マイケル・マン監督の一九九五年の映画『ヒート』は、まさにこのような都市を映像化している。市内の85のロケを使うことによって、この映画はロサンジェルスという都市のすべてを掴もうとしている。マッコウリーの仲間たちとヴァン・ザントの使いの男たちの撃ち合いが起こる人気のないドライブイン・シアターから、ダウンタウン心臓部の銀行強盗の衝撃的な銃撃戦、クライマックスの空港で繰り広げられるマッコウリーとLAPD捜査官ハナの対決まで、『ヒート』は壮大なロサンジェルスという都市をキャンバスとして、それを犯罪の景観で埋め尽くし、

都市景観とは犯罪景観であるとしたのである。

「L A学派」の弱点

「L A学派」はロサンゼルスという都市を通して、ポストモダン思想をいわば空間的に多分に誇張して表現していると考えられる。「L A学派」の中心的な学者たちが暗いイギリス出身（ディア）や寒いニューヨーク出身（ソウジャ）であるためか、彼らにとって、この冬でも温暖な都会は、その驚異的な陽光のゆえにかえって不健康で退廃的なものという印象が強く、堅実な都市研究の対象として捉えることがやや疎かになってしまっている弱点がある。「L A学派」はロサンゼルスをポストモダン都市の典型とし、それをグローバルな傾向として提示しているわけだが、果たしてこれは他のさまざまなポストモダン都市に現実にあてはまるものであろうか。それには大きな疑問がある。ハリウッド映画が作り上げたポストモダンの世界は、全世界に通用するようにマーケティングされて大衆はそんな気にさせられるが、結局それはハリウッド神話であり、現実の世界の国々はハリウッド映画のようになっていないわけではない。同様に、「L A学派」の理論はロサンゼルスを分析し説明するには多くの独創的な見方を提供したが、それで他の多様な都市を説明できるわけではない、といわざるを得ないのである。

「L A学派」の論じるロサンゼルスは、時として、ロサンゼルスを舞台としたハリウッド映画『アニー・ホール』や『パルプ・フィクション』の登場人物の言葉そのままの視点で支配され、その論理はハリウッド映画を理論化したもののように感じられる。ハリウッド神話の影響のもとで「L A学派」は発展した、と言ってもいいように思われるのである。これは、「シカゴ学派」の理論がリチャード・ライトを初めとする多くの文学者を生んだこととは対照的である。さらに、「シカゴ学派」になぞらえてできた「L A学派」に特に顕著なことは、これらの学者たちがしたことは、ロサンゼルスという彼らの研究対象を「典型」として逆説的に「特別視」することによって、彼らの学問的成果の価値を高めようとしているのという批判も出ている。それはロサンゼルス市当局の広報活動と大して変わらない視点ではないだろうか。

4. 『二都物語』から学ぶこと

1956年はアメリカにおける労働パターンの重大な変化が起こった年とされている。この年にホワイトカラー人口がブルーカラー人口を超えたのである。すなわちオフィスで働く人の方が、工場で働く人よりも増えたのである。このアメリカの労働の進化は、そのまま「モダン都市シカゴ」から「ポストモダン都市ロサンゼルス」が象徴する、製造から消費への経済のダイナミズムの移行を示している。「シカゴ学派」と「L A学派」というアメリカの代表的な都市社会学理論を見ていくことによって、私たちは確かにアメリカの政治・経済・社会・文化全体の進化をよりよく理解することができる。

だがすでに述べたように、どちらの学派の理論にも全体をやや単純に割り切ろうとする傾向があることは否めない。したがって、一つ忘れてならないことは、シカゴでもロサンゼルスでも（そしておそらくどの都市でも）、一つの都市が、すべての都市を説明できるような「典型」になることは無理であろうということである。一つの都市ですべてのアメリカの都市を説明しようとする考え方は、都市がそれぞれ特異な地理的、歴史的、人種的、政治的条件をもっていることを無視した、いわば机上の論理をもてあそぶことになりかねないという批判にさらされ

ることになるだろう。

引用文献

（本文中における以下の文献の引用は、すべて著者ソーントンによる日本語訳である）

- Davis, Mike. *City of Quartz: Excavating the Future in Los Angeles*. London: Verso, 1990.
- . *Ecology of Fear: Los Angeles and the Imagination of Disaster*. New York: Metropolitan Books, 1998.
- Dear, Michael J. and Steven Flusty. "Postmodern Urbanism." *Annals of the Association of American Geographers* 1998, 88: 50-72.
- . *The Postmodern Urban Condition*. Oxford: Blackwell, 2000.
- Garreau, Joel. *Edge City: Life on the New Frontier*. New York: Doubleday & Co., 1991.
- Harris, Chauncy D. and Edward L. Ullman. "The Nature of Cities." *Annals of the Association of Political and Social Science*, 1945. 1-17.
- Hoyt, Homer. *The Structure and Growth of Residential Neighborhoods in American Cities*. Washington, D.C.: Federal Housing Administration, 1939.
- Jameson, Fredric. "On Raymond Chandler," *Southern Review* 6, 1970. 3: 624-650.
- Park, Robert E., Ernest W. Burgess, and Roderick D McKenzie, editors. *The City*. Chicago: University of Chicago Press, 1925.
- Sale, Kirkpatrick. *Power Shift: The Rise of the Southern Rim and Its Challenge to the Eastern Establishment*. New York: Random House, 1975.
- Smith, Dennis. *The Chicago School: A Liberal Critique of Capitalism*. New York: St. Martin's Press, 1988.
- Soja, Edward W. *Postmodern Geographies: The Reassertion of Space in Critical Social Theory*. London: Verso, 1989.
- Wright, Richard. "Introduction" to St. Clair Drake and Horace Cayton, *Black Metropolis*. Chicago: University of Chicago Press, 1993.

〔たけし・あーさー・そーんとん 横浜国立大学経営学部准教授〕

〔2010年1月25日受理〕